

4. 随想 塔の心柱 坂巻 外史

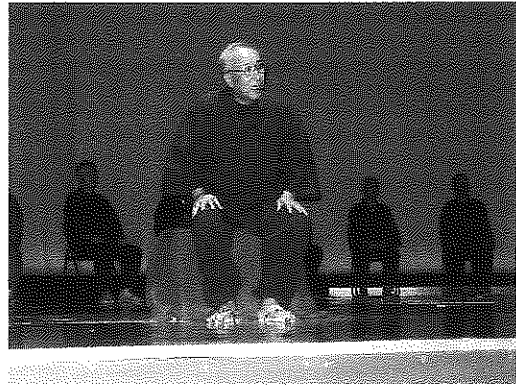
今年の夏、木立の中に未完成の三重塔と出会うことが出来た。

冷たい流しそうめんを食べようと、墓参の途中で妻とふたり、高速を降りて立山連峰を仰ぐ大岩不動尊の修験道場を訪れた折のことだ。

相輪や屋根は立派に出来ているのに、軸組は露出しており、外壁がない状態で建っている。江戸末期の作とある説明板を尻目に、そばに寄り覗き込むと、匠が築いた木組みが見え、塔の真中を一本の太い柱が土台から先端の相輪まで貫かれているのを望むことが出来た。

心柱が塔の構造には直接かかわってはいない事を知識としては理解していたが、それを偶然に下から上まで肉眼で見ることができたので感激、いや驚きであった。

いつの日か、五重塔が好きになり、その謎にふれ、地震で倒壊した例はないということを知って、興味を持つようになったのだが・・・。



県民活動センターにて民話を語る筆者

建物の中心に居ながら、全部の負担を支えていない。なんとも不思議な太い支柱、木造の建物に見られる大黒柱とはまったく違う逆の発想なのだ。

このようなバランス構造は木造建築の粋であり、棟梁の腕の見せ所だったのだろうが、それにしても、決して広くはない塔の中心に太い柱が居たんでは、狭くて仏像を安置するにも邪魔な存在であるのだが？

痛々しい落書きのある柱の前に立ちつくし、流木のように白みをおびた木肌に触れ、ひょっとして、「この心柱そのものが信仰の対象ではないだろうか？」と蝉しぐれの中で脳裏をかすめた。

本堂の脇に六条の滝があり、水音高く修験者の背に流れ落ち音が杜に響く。冷を求めて訪れる人を長い石段の上から眺め、いつの日か完成するであろう塔の相輪が大きく輝いてみえた。